氏 名 （ 本 籍 ）	福 山 一 光（岩手県）
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 177 号
学位授与年月日	平 成 19年 3 月 26日
学位論文等題目	〈作品〉 銀杏、冬の河川敷、雪持ち桜 〈論文〉 文様と律動－作画過程における創作心理－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 梅 原 幸 雄
（論文第１副査）	〃 〃 （ 〃 ） 竹 内 順 一
（作品第１副査）	〃 〃 （ 〃 ） 関 出
（副査）	〃 〃 （ 〃 ） 手 塚 雄 二
（ 〃 ）	〃 助教授 （ 〃 ） 齋 藤 典 彦

（論文内容の要旨）

現在に至るまでの自己の創作研究を振り返ると、表現に二系統の作品があるといわざるをえない。

そこで、それらの作品が如何なる意図で制作され、また如何なる要素が込められていたのかを探求することにする。

描くべき対象を見たときに、次のような二つのイメージが発生する。一つは対象を純粋に尊重しとらえたイメージ。もう一つは、自己の中に発生するイメージ（対象から刺激されて心の中に思い描くイメージ）である。創作活動の中では、当然ながら、イメージに重点を置いた作品が主流である。写生やスケッチなどは、すべての現象をありのまま写しとる行為に留まらず、対象を目のあたりにし、自己の内面に映る印象を尊重し、それを育て上げ、可能ならばそれが完成画に向かって、そのまま結晶するように描画することを念頭に置いて仕事をしてきた。本論では「文様化・パターン化」と「衝動・無意識・無計画」という二つの「軸」を想定し、この二つの軸の間で揺れ動くリズムのような心理状態、これを「律動」と呼び、個々の作品の分析を試みた。

本論でいう「律動」とは、完成画に向かって、あるときは「文様化・パターン化」の軸と、またあるときは、「衝動・無意識・無計画」の軸との間において、周期的に繰り返す「制作上の心の揺れ」のことである。言葉で言い表すのには不可能な領域の創作心理でもある。そのため、このことを判りやすく別の例を示せば、前者の軸とは、きわめて整然とした作画法、容易に完成しやすい作画法である。後者の軸とは、この整然とした作画法とは対極の位置にあり、あるときは効果を何も考慮せず衝動的に作画し、しばしば破壊的な結果を招く。それでは後者の軸を全否定すれば、安全な作画が可能ではないかという考え方も当然ながら生じるが、逆説的ではあるが、「破壊衝動」の側面が作品からまったく欠如すれば、それこそ感動を生み出さない作品に陥る。俗な言葉で言えば、「つまらぬ作品」にならざるをえない。失敗を恐れ、既成の表現様式などを踏襲することだけでは、自己の表現の探求に進歩はありえないと考える。危険ではあっても後者の軸を全否定せず、それを容認しつつ、適当な距離を保つことが、絵画を制作する上できわめて重要なことと考える。このような、相反する両軸の間で「揺れ動く」ことを「律動」と考える。これは自分の作画法における特殊な「定義」であることを承知で述べたものである。

一方、これまで多くの作家、とりわけ福田平八郎や横山操の作品に注目し、制作を続けてきたが、その要因は二人の作品に共通している「何ものにもとらわれない自由さ」、あるいは「大胆に簡略化された

表現」に触発されたことである。また、この分析は自己の作品のみならず、影響を受けた二人の作家の作品にもある程度応用できるのではないかと考える。

自己の創作過程を客観化することは、きわめて難しく、可能なかぎり実態にそって再現を試みたが、そのこと自体も「律動」の一種ともいえる皮肉な課題であったともいえる。「文様化・パターン化」という軸と、「衝動・無意識・無計画」という軸という設定は、自己の制作過程を分析し、第三者に提示する手段としては、有効な考え方と思う。しかしながら、この二つの軸の間に揺れ動く「律動」のみで創作の心理状態をすべて文字で書きあらわすことは、いずれにしても不可能な作業であるかもしれぬが、「造形」と「制作心理」という大きな命題に一歩でも踏み込めたことを幸いに思う。

もともとパターンとは、どちらかというと工芸分野の要素であり、リズムとは音楽芸術の要素である。この異質ともいえるツールをもって分析したことは、今、本論を書き上げて、いささかの励みになった。

考えてみれば、世の創作論は、この不可能な課題に焦点を当てて挑戦し続けている。これからも、将来にわたって「律動」が継続されていくのだろう。